

24 節. 「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。」

主イエスの弟子を指す「十二人」という言葉は、ヨハネによる福音書では、6 章 67, 70, 71 とここしか出て来ない。

「ディディモと呼ばれるトマス」。「ディディモ」も「トマス」も「双子」という意。

11:16 「すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、『わたしたちも行って、一緒に死のうではないか』と言った。」

14:5 「トマスが言った。『主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。』」

これらの個所の他に 21 章 2 節にも登場する。マグダラのマリアやニコデモ同様、ヨハネによる福音書を生み出した共同体（ヨハネ教会）とは深い関連があると思われる。復活の主イエスに出会った弟子として個人名が挙げられているのは、マグダラのマリアとトマスだけ。ついでに、後に彼はインドまで行って伝道したと言われる。

「イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった」。主イエスが復活された週の初めの日の夕方、ユダヤ人を恐れ、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた弟子たちは、主イエスの許から夜の闇の中へと行ってしまったイスカリオテのユダ、そしてトマスを除く 10 人だけになる。

25 節. 「そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』」

「わたしは主を見ました」。復活の主イエスを伝えたマグダラのマリア（18 節）と同じ言葉を弟子たちはトマスに言う。復活信仰は、「わたしは主を見ました」という使徒たちの証言を信じるところから始まる。ところが、この、人の思いを遥かに越えた主イエスの復活という出来事は、普通の人間の理性では理解することができない。だから人間は感覚的（触る、見るなど）に納得できる証拠を求める。あるいは理性で理解できるものを求める。それが不信仰である。

復活の告知は聴く側の信仰を求めるが、しかしその告知を聞く人は不信仰で対するのが普通である。マルコによる福音書 16 章 11, 13, 14 節には、墓が空であることを聞いた弟子たちは、その報告を信じなかったのもので、その不信仰が、復活の主イエスによって責められたことが記されている。ヨハネによる福音書では、トマスが弟子たちの不信仰を代表して登場していると言えよう。そして、その不信仰を克服して「信じ

る者」になる人間をも代表することになる。「釘」(ἦλος、ヘーロス)。この単語は新約聖書全体でこの節の2回しか出て来ない。

26 節. 「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

「八日の後」とは、復活された週の初めの日を一日目として「八日」ということなので、次の週の初めの日、つまり主日(日曜日)である。「弟子たちはまた家の中におり」。主イエスが復活された週の初めの日に弟子たちが定期的集まっていたこと、つまりユダヤ教の安息日の土曜日ではなく、週の初めの日に弟子たちが集まり礼拝していたことが伺える。

「戸にはみな鍵がかけてあった」。19 節の状況と同じ。弟子たちは再び家の中に閉じこもっていた(?)

この八日間、トマスはどのような思いで過ごしたのであろうか。他の弟子たちは復活の主イエスに会い、喜びに満ちている中、トマスだけは依然心の扉に何十の鍵をかけていたのではないだろうか。「一緒に死のうではないか」とまで言っていたのに、一緒に死ぬどころか、逃げてしまった罪責感などによって彼の心は依然真つ暗な家の中のような状況であったであろう。19 節にある他の弟子たち同様に。

その彼にも復活の主イエスは現れ「あなたがたに平和があるように」(シャローム)と語りかけてくださる。

27 節. 「それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』」

主イエスは、今回はトマスだけに語りかける。そしてその言葉は8 日前の、他の弟子たちの証言を聞いた時のトマスが言った言葉である。あの時のトマスの言葉を主イエスは全部聴いておられた(?)。復活の主イエスに触れる、触ることは八日前のマグダラのマリアには禁止されていた。あの時は「まだ父のもとへ上っていないのだから」と言われている。「信じない」「信じる」とは、主イエスの「復活」を信じるか信じないかということである。

28 節. 「トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。」

「わたしの主、わたしの神よ(Ὁ κύριός μου καὶ ὁ θεός μου.、ホ キュリオス ムー カイ ホ セオス ムー)」

トマスにとっては、信じたくても信じられなかったはずの主イエスの復活。理性では理解できない故の不信仰が、主イエスの顕現と自分への語りかけによって信仰へと

変わる。トマスは「わたしの主、わたしの神よ」(My Lord and my God!)と告白する。

「『トマスの告白の『わが主よ』はこれまでの『主』という使い方が、復活した『主』をさすのであることを明らかにする(20:2, 13, 18, 20, 25, 28)。『わが神よ』はここではイエスに向けてではなく、父なる神に向けられたものと解したい。なぜなら 14:7 でイエスはトマスに『またすでに父を見たのである』と言っているからであり、イエスを見た者が父を見ることがここで実現したのである。また 17 節でイエスはマリアに「わたしの父」と言っている。この呼びかけて第四福音書は頂点にいたる。』」(伊吹)

息吹氏のいうように、「わたしの主、わたしの神よ」という告白は、この福音書の頂点である。ヨハネによる福音書は 1 章 1 節で「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と語り、最後に、復活して現れた主イエスに向かって、この告白をしている。つまり、福音書の初めと最後に、主イエスを「神」(子なる神)と告白する言葉を置くことを通して、十字架上で死に、葬られ、三日目に復活されたイエスは、真の神であることを告げているのである。

29 節。「イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。』」

弟子たちの復活証言に対しトマスは、「見て、触る」ことをしなければ「決して信じない」と言った。そのトマスに、「見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」と復活の主イエスは言われる。主の初めの日に肉眼で復活の主イエスを見た弟子たちの経験は、彼らだけの特別な体験である。トマスの体験も同様である。彼ら以後のすべてのキリスト者は、彼らが伝える福音によって信じるようになった者である。この福音書が書かれる時代のキリスト者たちも然りである。

「見ないで信じるとは、弟子たちや復活の証人たちのケーリュグマを聞いて信じるということである。その根本にはこの両者が同じ出来事なのであるという、宣教の言葉が神の言葉であり、その言葉のうちに、顕現を見ると同じことが起こるということが述べられている。これがケーリュグマというものの本質であり、この言葉が福音書の物語全体を対象としている。そしてこの言葉の本質にキリスト教信仰のすべてがかかわっている。このケーリュグマの本質を明らかにする言葉がこの福音書のイエスの最後の言葉なのである。これ以外話されるべきことは何もない。この言葉は世の終わりまで響く。」(伊吹)

* 「ケーリュグマ」：福音宣教のこと。

「幸いである」(μακάριος、マカリオス)。この言葉で「この福音書は終わる。これは終末の救いに与る人間の幸いを喜びをもって称える祝福である。……。トマスの物語はこの言葉のために書かれたようなものである。」(伊吹)